

思い出の記録

福井県 山本 武治

私はいまより約五十数年前、あの悲惨なる第二次世界大戦の渦中に飛び込み、そして敗戦、最後は捕虜という人生最悪の運命に遭遇した一員である。私は今、当時を追想し、戦争ということをごの地球上のどこにも起こらないよう、後世の皆さまに記録によって訴えたく筆を持たった。私は八十歳の高齢に達し、当時の記録とて何もなく、思い起こしながら綴るので、理解出来がたい点多々あることを前書きする。

私は戦前、現役入隊任務を終え除隊、その後上海事変、日支事変と二回の召集を受け中国大陸を転戦、運よく昭和十五年無事帰還できた。もう召集がないと思っていた矢先、昭和十九年ついに第三回目の召集令状が来たのである。そのころは戦況も悪くなり、占領地は奪還され、本土は爆撃を受け危なくなっていたのである。その上、

家庭は以前とは違い父を亡くし、幼い子供五人と弱い妻を残しての応召には身を切られる思いであった。戦況から見ても今度こそは帰還できるとは期待できない。命令は絶対に守らねばならない。あいにく秋の取り入れで、いつもなら十月いっぱいかかる取り入れを知人にお願ひして無理に済ませ、長男も農学校在学中でしたが、退学させ、心残りのないよう整理をして、後ろ髪を引かれる思いで十九年敦賀連隊に入隊したのである。

入隊して見ると予想した以上に驚いたのである。軍服は古いものばかり、兵器はなにもないのと同じ、連兵場は甘藷畑と化し、主食は甘藷に米粒がついている程度、こんなことで戦争が長びくほど不利になることを痛感した。そのうち、我が中隊は三重県の志摩半島方面に転勤を命ぜられた。何が目的かと思ったら、山の中に一個中隊ほどはいれるような穴掘りである。聞くところによれば、太平洋沿岸一帯を本土決戦に備えての陣地構築だったのである。結局は軍部も最後の覚悟を決めていたものと想像される。今もその壕が残っていることか。明けて昭和二十年二月いよいよ第一線補充要員として満州行き

を命ぜられ、一泊の外泊が許可され帰宅しようとする福井まで汽車で来たが、あいにくその年は例年にならない豪雪で、大野までの越前電鉄が永平寺口からは不通とのことであつたが、家族との最後の別れがたく行けるところまで行こうと決心、電車に乗り、永平寺口まで来たが、案内どおりそこから線路上を徒歩でやつとのこと大野三番まで着いたが、そのころ暗くなり、家まで約十キロもある。思案したが、やつとここまで来たのだからととぼとぼと出発、十一時ごろやつと家に着いた。疲労は極度に達したが、翌早朝家を出発、連隊に着いたのが時間遅れ、それでも軍隊経験の長き者、事なしに済んだ。そのころはまだ三十歳代で元氣もあつてこの苦勞も乗り越えられたと、今感激する。

いよいよ京都で隊を編成し、普通ならば野戦に出征するとき、一般に戦時軍装といい、新品の兵器被服を携帯着させるのに、今度は全く別、官給品として水筒の代用に竹の筒と雑のうだけ。あとは私物品だけ、寂しい限りであつた。長崎港より出港、何回出征しても国土を離れるのはつらい。でも航海無事朝鮮釜山に上陸、直ち

に貨車に乗せられた。これまたすごい。貨車の中にぎゅうぎゅう詰めに立たせ、一度に座らせる。携行品は尻の下やら膝の上。時々汽車がとまり、便所に行くにも、他人の足を踏むやら肩に手をかけるやら大騒ぎ。食事分配も大変だった。

満州国に入ると外は零下二、三十度、白一色、木々は凍り花、雪国に生まれた我々も驚く。我々の任地目的地はソ連国境の孫吳警備隊に下士官要員として配属されたのである。私は中隊の兵器被服係を命ぜられる。それにしてもこの重要な国境警備に兵器被服の少ないこと。兵器として我々歩兵部隊に兵士三人に小銃一丁、中隊に軽機関銃三丁というさびしさである。兵隊は老兵やら弱々しい者ばかり。兵器や若い者は皆南方の戦線に送られたのである。それでも食糧は多く、米など袋や俵ではたくさん入らないので、バラにして空き兵舎等に満量である。内地の食糧不足とは対照的で戦時中の物資の不平等なることを痛感する。

そのうち八月一日付で進級する。途端に我々ごとき者に、将校が不足とのことでの教育を受けさせるため、

遠く遼陽の士官学校に入学を命ぜられ、そして厳しい訓練が始まったのだ。八月九日ソ連が不法にも国境を越え満州国に侵入したとの情報に接し、原隊復帰を命ぜられる。よって原隊へ帰還のため、北上の汽車でハルビンまで来たが、これより北上の便なく南下する避難列車だけ。これには軍将校の家族ばかり、地方人（開拓民）は少ない。これも軍部の独占の現れである。私はいちし方なく当地駐在の某旅団の指揮下にはいり、市内の旧ロシア系の家（ハルビン陸軍病院長の家）に宿泊させてもらう。

いよいよ八月十五日、ラジオで天皇陛下の終戦の放送を聞いたのである。すなわち敗戦である。予想はしていたが、直面すると感慨無量である。先に中国大陸で各地で転戦生死の境を何度かくぐり抜けたのも、内地で勝つまでとは銃後の守りと生産に努力した一般国民も、一瞬にして水泡に帰したのである。

さて、我々は今勝った国に行くのである。これから何が待っているであろうか。それは捕虜という経験したことのない悲惨な運命に落とされるのである。八月十六

日、ソ連軍は重戦車数十台を先頭に無血でハルビン市内に侵入したのであった。日本警備司令部は直ちにソ連司令部に奪取されその指揮下に入る。翌十七日、命により兵器はことごとく返納する。私は馬鹿らしいので、拳銃は井戸の中へ落とし、軍刀のみを返納して素手となった。武器を持たない恐怖と悲惨さは、痛恨極まりない。

満人をこれまで苦力（クーリー）として使用したのが正反対。従って満人の略奪暴力が各地で始まる。我々も食糧だけは確保と、恐る恐る軍の倉庫などを物色する。

八月二十三日市外の元鉄道連隊にハルビン市及び付近にいる日本兵全員集合せよの命令に頼り、ある程度食糧、被服を持参して集合した。これが捕虜としての第一歩である。

これから徒步行軍が始まる。どこへ連行されるかわからない。二日目くらいか道端に子供の泣き声がある。これは開拓民が逃げる途中耐え切れず置き去りにしたのである。今思うに、戦争孤児の肉親探しに日本に来る者は、幸いにも満人に養われて成長したので、捨てられた子供より幸せである。また家財道具等荷物もあちこちに捨て

である。この悲惨なる光景を今でも思い出し身ぶるいする。

こうなると、問題は食糧である。出発の際携行した物がなくなるころ、九月一日よりソ連の給与となり、牡丹江の手前の元日本軍の兵器庫に集結、食糧の配給が始まる。食糧といっても皮つきのコーリヤン(きび)である。三時間も四時間も煮なければ軟らかくならない。米食から一変してコーリヤン食、消化が悪く胃腸がびっくり、下痢する者続出。にわかづくりの便所も満員、今も思い出し笑いの種である。

ちょうどこのころ、私と行動をともにした現地応召の満州開拓民の人と命からがら一人の日本人が、食う物もなく助けを求め我々捕虜部隊にやってきて、二人が対面したのである。実は二人は、同じ開拓団員で苦勞した仲であったのだ。彼曰く、自分は〇〇開拓団で老人子供婦女子等四、五十人が鎮守の氏神様に集合、集団自殺を決意、団備え付けの軽機関銃で全員を射殺、自分は死に切れず、逃げて来たとのこと、自分だけが生きていることの悔しさで泣き崩れるのである。そして君の奥様や子

供は何月何日が命日であることを告げていた。彼らが逃げても到底老人婦女子で逃げ切れないと自殺した行動は、開拓魂を持った日本人のみにでき得ることと敗戦のみじめさを改めて痛感した。

この中、牡丹江市の元日本軍の兵舎に集結され、何千人という大部隊となり捕虜生活もあきらめと慣れたのとでだいぶ板についた感じである。

ここで思い起こすのは、私の原隊すなわち孫呉警備隊のことである。ソ連軍と交戦して犠牲者を出したのか我々と同様無血捕虜となったのか、その存在は今も不明である。私が士官学校へ派遣され出発の際、原隊に置いたままの私物品はどうなったのか永久に手に戻らない。勳章、記章、千人針、お守り等。

ここでソ連に捕虜になってばかげたというか、あほうらしいというか、変わったことを記すことにする。

そのころ日本内地でも同じであったが、シラミが発生して困ったのであるが、ソ連人も大いにこれを嫌い、月に一回必ず頭髮はもちろん、脇の下などの毛を剃らせる。剃るときの痛いことは忘れられない。入浴は一週間

に一回はさせるが、一回に小さい湯桶に三杯ずつ、湯槽に入るようなことはない。

そのころから家族へ手紙を書かせた。満州にあってよき待遇を受けているとか、近く帰還できるからとか。全部検閲して出させる。何十通出したことか、自分らも正月までには帰れると信じていた。時々交代で使役に出させる、それは近くに元陸軍病院があって、毎日死亡する我々同僚の埋葬である。ほとんどが栄養失調でやせ衰え、ガラガラになって死ぬ。こうして十月初旬から約三日の大隊編成で出発させた。そのころ相当寒くなったので、日本軍の新品の帽子から靴まで（押収品である）全部着替えさせたので、日本帰還のための出発だと信じて、先に帰る者は幸せだと恨んで見送った。

いよいよ我々は最後になって、今でも覚えてる十一月二十三日であった。例によって大隊編成をして、子供のごとく喜び勇んで貨車に乗った。すると便所から炊事場まで整っている。浦塩やナホトカで乗船するだけなら、このような設備は不用だと思ってもみたが、まだ帰れると信じていた。三日ほどたって、汽車は満州国ソ連

領に入り西方に向かって進行する。不思議と思つて車外を見ると、日本人が作業している。途端どこかへ連行されるのが初めてわかったのだ。これまで喜んでいたのも一変、だまし続けて彼らの行動を信じ切った我々のはかなさ。同僚顔を見合わせ、落胆はその極に達したのである。しかし今はどうすることも出来ない。彼らの意のごとくである。

嘆き悲しんでいる中、汽車はハバロフスク駅に着き下車させられる。その晩は、大きい倉庫の中で一泊、翌日トラックに荷物のように乗せられ走る数日、山また山、これがシベリアの大森林地帯なのだ。

どの方向へどれだけの距離を走ったのかさっぱりわからない。ようやく建物らしきところでおろされた。これが三〇九収容所であった。一個大隊三百人も入られるような建物、階段式の寝台、中央に大きい暖炉一個、中へ入るとひえびえとしていたが、暖炉の火が燃えると結構暖かい。その夜は寝台にモミの木の葉を敷いて寝た。翌朝起きると、外は零下三十度、配給の食糧は大豆や小豆だけ、水はなく、外へ出て雪をかき集め溶かして大豆な

ど煮るのに使用した。その当時の食物環境等を思い起すと、栄養失調にならないのが不思議なくらいである。それでも日がたつにつれて待遇が少しずつ改善された。それは世界赤十字の捕虜規定に基づくもので、ソ連側も我々日本人を人並みに扱いかけたのである。また、同僚の中には器用なものもいて、収容所内も改善された。しかし作業は厳しい。

一か月に一回身体検査をする。検査といっても軍医が裸体にさせ、尻のふくらみ部を指でつまんで弾力のある者から一、二、三級及びOK（オカ）の四段階にわけ、一、二級は重作業、三級は普通、OKは所内の清掃くらい。従って収容所も級ごとに違い、検査ごとに移動する。私は、二、三級、OKを繰り返していた。また作業大隊へ配属されても作業には出ず、大隊内でソ連側よりの命令受領及び食糧被服の係であった。命令受領といっても、明日の作業の出動人数その他の内務の注意事項等で、夜遅くなるので困難だった。通訳を通して命を受け、これを中隊に報告する。困ったのは、事務用品のないことだった。鉛筆など短くなって持てないようになると、

木を足してひもでくくって使った。また、紙類も少なく、木の枝等を拾い代用したこともある。

収容所は二キロか三キロくらい離れて建っていた。これは、本国より刑務所の囚人を連れてきて作業させたとのこと。作業は、森林を切り道路をつくることである。将来は、今一本のシベリア鉄道を二本にする計画らしい。自分は、作業大隊に編入されても、大隊の命令受領、食糧被服係で、直接作業には出なかった。しかし命令受領が大変で、ソ連側の翌日の作業命令が遅く夜十時ころになる。通訳を通じ受領するのであるが、これを大隊及び中隊に伝える。

ここで作業のノルマ制について各作業に基準を設け、一〇〇%できれば一〇〇%の食糧、八〇%しかできないときは八〇%の食糧、一二〇%できると相当の食糧と分配に苦労した。このころ我々は、食べることに捕虜という逆境から脱出して、いつ帰国できることか、頭の中はそればかりであった。作業に行くには弁当持参である。足りないので、春は木の芽、草の芽の出る時期になると、昼食の際これを摘み取り、飯ごうに水とともに量

を増やし炊き直し、満腹を味わった。また、シベリアの山の中へ連行された当時、あまりにもひどい待遇を悲観し、来春暖かくなったら逃亡を企てようと、マッチだけは隠し持っていた。これは浅い考えであった。すなわち自分らは今どこにいるのか、川伝いに行けば満州国か海岸に出る、それは違いないが、そこまで何日かかったら着けるのか、それまでの食糧、体力が持つか、満州国に入れても、これも今は敵国、その幼稚なる計画、翌春ただの一人も逃亡した者がなかったのである。そこで誓い合った。この逆境で、シベリアの土になってたまるものと忍ぶことを。

ここでシベリア地方冬期間の気候について書く。毎日零下三十度、四十度でこんなとき、外は細かい雪の横吹雪、体感温度は六十度もあるという。防寒衣に身を包み、目だけ出して外に出るのであるが、まぶたが上下凍りつき開けがたいくらい。こんなとき、作業主任は続行と言い、軍医は中止と両方意見対立、結局はまき取りだけで終わったこともある。また、便所は大きな深い穴を掘り、そこに大小便をするのであるが、直ちに凍って、それは

便の彫像のように高く積み上がる。これを穴の中に入れて鶴はしで碎き、スコップで地上に上げ運ぶ。これを大して汚いとも思わない。また、夏季になるとシベリアにも種々の花が一度に咲く。この期間は短い。また、夜十一時ころまで明るく、朝三時ころに夜明け、暗い間はまことに少ない。これは北極に近い関係だろう。

次に警備について、収容所の四つ角にやぐらがあって、ソ連兵が銃を持って監視、周囲は鉄条網を張りめぐらし、この網の中へ手や足を出したら直ちに銃を発射する。また、作業場への往復、作業中など武装した兵士が警戒する。さて二年目ころになると、待遇も食糧もよくなった。朝はソ連の黒パンで、主食はコーリヤンだが程度もよく、量も多くなった。また、一日に砂糖と煙草が三グラムずつ配給されるようになった。こんなときより思想的訓練が始まった。これは同僚のある者がどこかへ行って共產主義の教育を受け、これを我々を一堂に集め、これを受け売りする。また、夕食後など所外でスクラムを組ませ、赤旗の歌を合唱させる。作業場への往復も同じことをさせる。しかし我々は表向きははいはいと

わかった顔をして、内心は絶対変わるものではない。あくまで先祖伝来の血を受けた日本人である。

次に、それはOK隊にいたときである。隣にソ連の囚人の収容所があつて、彼らの食糧のバレイシヨの倉庫がある。それを囚人が盗みにくるので、この警戒に我々を使うとのことで、自分が抜てきされた。服務してみると、芋はいくら食べてもよいとのこと、特別に毛布をくれ、待遇はよい。火を起こし芋を焼き腹いっぱい食べる。これを四、五日続けた。不思議に体が肥える。動物は大して栄養のないものでも満腹すれば肥えることを改めて知った。もっとも胃腸は不良化食物になれたお影であらうか。

さて人間は、不遇のどん底にあるときは自己を守るのが精いっぱい。他のことを考える余地がないが、少し余裕ができると、経験したことのない敗戦といううき目に遭っている内地のこと、家族のことを思い出すのが自然の心理であろう。かくして翌々年昭和二十三年七月だつた。転々と収容所を変え、またOK大隊にいたときである。一通のはがきが届いた。まさに妻が書いたものに違

いない、夢のようだ。ただ家族が無事であることのみ、それでよい。これで両方が安心できたのである。これもこのOK大隊にいたからで、他の大隊にいたら受け取れなかつたので幸運であつた。

折も折幸運は続くもの。検査をして弱き者はダモイ（帰還）させるとの命令、自分もその一員に加えられた。その喜びは、明けても暮れてもそのことが頭から離れなかつたのにそれが実現するのだ。どこをどうして運ばれたかは記憶にないが、内地帰還は間違いない。途中汽車に乗せられたりおろされたり、また作業させたこともあつたが約一か月後やっとナホトカ港に着いた。輸送船の来るまで滞在とのこと、またここで我々同じ日本人が、最後の仕上げと共産主義の徹底宣伝に血を吐くくらいに語り続けていた。この日本人は残留したのか、行方はわからない。一週間は続いたのであるうか、輸送船が着いたとの情報で港を見る。三年目に見る輝かしい日の丸の国旗。我々はこれまであの国旗の下で活動してきたのである。

いよいよ乗船の日がやってきた。足かけ約三年間、猫

の皮をかぶり、あらゆる面において耐えに耐えて、捕虜という逆境から脱却できる瞬間である。棧橋より本船信濃丸に乗船の際、大地を二度と踏むまいと大きく蹴って乗り込んだのである。船中に入るや忘れもしない懐かしいみそ汁の匂い。食事はプリの天ぶら、野菜の煮つけ、豆腐のみそ汁、漬け物、三年目にして味わう日本料理。精いっぱい我々に対する接待だったのだ。胃も腸もびっくりしたことだろう。航海つつがなく舞鶴港着、検査を終え上陸。一週間滞在、その間日本の状況など、すなわち都会の空襲爆撃を受けたこと、広島、長崎両市が原子爆弾を受け、全滅したこと、今、日本が食糧不足で困っていることなどを聞き、戦争の後遺症でその立て直しに懸命であることなどを知らされた。

そして家族に通知もせず、家に着いたのが九月十五日、あまりにも突然のことで子供など父とは思えなかったらしい。すなわち被服はソ連製、顔は土黒く、化け者くらいに見えたであろう。が、よく見ると間違いなく父であり、夫であった。家族たちは泣きくずれるのであった。あの酷寒の地で、捕虜という最悪の運命に遭っていた

たとき決心した、何があんでもこの土地の土になりたくないと精神力で打ち勝つことができ、ここに実現したのである。今は精神的肉体的に疲労の極にあるが、自然に回復に努め、第二の人生に出発したいと誓ったのである。一、三日家にとじこもり休養して、留守中世話になった区内や親類など挨拶回りをして、やっと我に返った気分になれた。

無 題

栃木県 富 樫 源次郎

日本国有史以来、いまだかつてなき終戦を悲憤の涙のうちを迎えなければならなかった昭和二十年の八月、満州の寧安近くの山の中でソ連軍の武装解除を受け、その年の秋に貨車で国境を越えてソ連領に送られた。

確かハバロフスク経由でテルマというところで下車、その収容所らしき鉄条網を張りめぐらされた中で二日くらい過ごして、今度はトラックにすし詰めに乗せ